



大島祇園祭 (山笠)

『新修宗像市史』民俗・美術・建築部会から

一 夏の祭祇園山笠

夏の祭といえば、博多の山笠を思い浮かべる人も多いでしょう。博多人形師の人形が飾られる人形山笠は飾り山笠と昇(か)き山笠の二種を造り、昇き山は約五キロメートルの行程を走り抜けて時間を競っています。実は人形山笠は、博多だけでなく、北部九州だけでも百力所以上のところで行われています。祇園祭という名前のおり、祇園信仰と共に広がったもので、京都の祇園祭山鉾の影響が考えられます。山笠は「ヤマ」と呼ばれ、笹、ハタ、提灯を掲げたものもあります。人形ヤマは、特徴から博多系(福岡県博多祇園山笠を中心とする)、津屋崎系(福岡県津屋崎祇園山笠を中心とする)、日

田系(大分県日田祇園山笠を中心とする)、直方系(福岡県直方多賀神社を中心とする)、浜崎系(佐賀県唐津市須賀神社を中心とする)と分類でき、宗像市内では津屋崎系のヤマをみるることができます。今回は宗像市大島で行われている山笠を紹介します。

二 準備作業

大島の山笠は、現在七月十五日に行われています。ヤマは、「鯛(豊漁万鯛)」「浦島太郎(浦島ヤマ)」「ドラえもん」「白馬(くまもん付き)」「人形ヤマ(鯛を持つ人形)」の五基のヤマです。博多のヤマのように競走はありませんが、島内の主な道を駆け抜けていきます。子ども広場を会場に準備が進められます。前日

までに保存会のメンバーを中心に、ヤマを入れる小屋やテントを建てたり、地元の人々の「気持ち程度」というお金を受け取り会場に名前を貼り出したり、道々に大漁旗を揚げたりします。そしてヤマを入れている小屋のところから放射線状に色とりどりの祈願旗を掲げます。祈願旗は、区毎に色分けされ、「無病息災」などの祈願が書かれており、既に中津宮でお祓いをして頂いています。以前はこのハタをヤマに付けたハタヤマが島内を走っていました。人形ヤマに変わったため、ハタを会場に飾るようになりました。

大島のヤマは、もともとハタヤマを昇いていました。島の人口の減少とともに、昇き手も減少したため、祭を続けるための工夫をしました。ヤマに台車を付けたのです。昇き手である島の漁師にとっては翌日のモグリ(潜水漁)のときの体への負担が軽減したという利点だけでなく、車輪のおかげで、島民のあらゆる世代が祭に参加できるよう

になりました。

三 祭当日の流れ

十三時三十分にもども広場を出発して、中津宮一の鳥居前にヤマを運びます。十四時にその横の須賀神社で中津宮宮司によって祇園祭神事が行われ、終了後ヤマを清めてもらいます。

いよいよ出発です。ヤマを昇く人は、昔は博多同様、締(し)め込(こ)み、脚絆(きゃはん)、地下足袋(じかたび)でしたが、今は白の水法被(みずはつび)に下半身は自由、豆絞(まめしぼ)りの手ぬぐいを鉢巻(はちまき)にしたり首にかけたりと、決まりはなく自由です。テボ(カゴ)を持った人が先頭を進み、オシオイ(海砂)をまいて道を清めて行きます。「白馬(くまもん付き)」は保育園児と小中一貫校である大島学園の一・二年生、「ドラえもん」は三・四年生、「人形ヤマ(鯛をもつ)」は五・九年生の女子が昇き、島の東へ向かいます。「浦島太郎」は五・九年生の男

子が大人と一緒に昇き、成人男性の昇く「鯛」と共に島の西方

「うみんぐ大島」へ行き、すぐに折り返して東に向かい、次の休憩所の郵便局前で全部一緒になります。「わっしょい、わっしょい」と掛け声がこだまする中、

「鯛」と「浦島太郎」は自転車でも追いつけないほどの猛スピードで駆け抜けて行き、沿道の人々は「きおい水」をかけて声援を送ります。きおい水は、「勢(いきお)い水」がなまった言葉で、ホースやバケツに汲み置いた水をかけ、昇き手の火照った体を冷やす役目をします。郵便局前、宮崎の広場、そして折り返して大島学園前でジュースやスイカの接待を受けて休憩し、約四キロメートルを走り、一時間ほどで広場にヤマが戻ってきます。

広場では式典となり、「みあれ太鼓」演奏後、「博多祝いめでた」を一番のみ歌い、「博多手一本」という「ヨー」シャンシャン(拍手)、「もひとつ」シャンシャン(拍手)、「ヨー」シャンシャン(拍手)の手締めです。博多の

慣習を意識しています。そして直会(なおりい)が続きます。

四 ヤマの歴史

以前は七月の満月の日に行っていました。昇き手の中学生が中体連の試合と重なるなどの不都合から七月十五日に固定しました。また前に述べたように、ヤマもハタヤマを昇いていましたが、車輪を付けました。昇き手の確保に努めたのです。

車輪が付く前は、博多の昇きヤマのような勇ましい面もあり、波止場近くの漁協前から子ども広場までの直線約二六〇メートルを二基で競走したり、東端の宮崎まで行った帰りに海に入り、小夜島の後ろを廻ったりしたこともあったようです。

やがて津屋崎人形師を連れてきて人形ヤマを飾り付けていましたが、「鯛」のヤマを買い上げ、自分たちのヤマを持つことにしました。そして中津宮を通じて博多山笠から「浦島太郎」を寄贈

してもらい、人形ヤマは二基となりました。また今でも交流がある宗像市内田熊の田熊山笠から「波しぶき」などの飾りの寄贈もあります。昭和五十一年には、地元と大島学園(当時大島小学校)により子どもたちが昇くヤマが二基、平成十九年にさらに一基誕生し、いよいよ島民全員が参加でき楽しめる祭となりました。

また四十年前まで、台と棒は別々に中津宮の倉庫に保管し、海水で「棒洗い」をしていましたが、現在棒は台に縛り付けたまま、大島学園の倉庫に保管しています。

博多では祭の間、櫛田宮の神紋に似ているためキュウリを食べません。大島でも六十年前までは食べることを禁止していましたが、今では気にしていません。さらに博多と違って、女性がヤマや小屋に触っても何も言われません。昔から食事の用意など裏方に尽力しているためです。大島の山笠の特徴ともいえます。このように工夫を重ねながら

続けられている大島を代表する活気ある祭です。

(民俗・美術・建築部会

吉田扶希子)



現在の人形ヤマ「鯛(豊漁万鯛)」
(2018年7月15日撮影)



16年前のハタヤマ (出典:『広報筑前おおしま』113号、2003年8月)